



Heart to Heart



生徒が主体的に「考え、議論する」道徳授業

モラルジレンマ教材を用いた「あい学習」をもとに

「ヨーロッパで一人の婦人がたいへん重い病気のために死にかけていました。医者は彼女を救うにはただ一種の薬しかないと言いました。それはおなじ町に住む薬屋によって発見されていました。薬屋はその薬を製造するのに200ドルしかかからなかったのに、わずか一服分の薬に2000ドルの値段をつけました。病気の婦人の夫であるハインツはあらゆる知人にお金を借りました。しかし、薬の値の半分の1000ドルしかお金を集めることができませんでした。かれは薬屋に妻が死にかけていることを話し、薬をもっと安くしてくれるか、でなければ後払いにしてくれるよう頼みました。だが薬屋は『だめだ、私が苦労してその薬を発見したんだし、それで金儲けをするために頑張ったんだ。それに、他の客にもそうやって断っているんだ。』と言いました。思いつめたハインツは妻のために薬局に押し入り、薬を盗む計画を立てました。」

さて、ハインツの行いは正しいですか？間違っていますか？

今年度より、「特別の教科道徳」が設置され、改めて道徳の授業で「多様な価値観を認めること」、「特定の価値観を押しつけないこと」が強調されました。価値観の押しつけをさけるための授業方法としてモラルジレンマ教材を使った授業があります。ある究極の二択を迫られた時、そもそもその二つの選択肢はどちらか一方を選んだり一方を捨てたりすることができないことがあります。どちらかを選ぶということがそもそも間違っているというシチュエーションのもとで心に起こる葛藤を“モラルジレンマ”といいます。

8月20日、京都市立東向島中学校の吉岡淳史先生を講師にお迎えして教員研修を実施しました。教師が一斉授業で教えた事を教えたように教えるのではなく、授業中に子ども同士がお互いに語りあい、教師の設定した課題を達成していく授業方法について学びました。様々な道徳的葛藤場面に直面したときに、AかBかといった二者択一の考え方ではなく、「ともに同意できる案を探してみないか」という考え方と『あい学習』（『学び合い』）を用いた道徳授業の指導のあり方を教員みんなで検証しました。モラルジレンマの議論をしていると、善悪の峻別がつかない、という問題点が上がりますが、モラルジレンマを学ぶ一番の目的は、多様な価値観を学ぶことです。ハインツの行いは正しいですか？間違っていますか？世の中には白黒つけられないことがあるということをモラルジレンマ教材は教えてくれます。

教員それぞれが、自分の授業のあり方をふり返り、より良い授業を目指してさらに研鑽を積むことの必要性を実感する研修となりました。



「生きる力」を育み、未来を拓く道徳教育を目指して

2002年以降実施の学習指導要領において、ゆとりの中での特色ある教育によって「生きる力」を育むという方針が始まりました。そして、2011年以降実施の学習指導要領においても、ゆとりでも詰め込みでもなく、「生きる力」をよりいっそう育むという方針です。道徳教育においても、そのことにこたえていく必要があります。

今日の子どもたちは、国際化や情報化が進む中で、それらに対してうまく適応しながら成長しています。しかしながら、心の成長については、決して充分とはいえず、自分や友だちを大切にできなかったために起こった事件も多くみられます。このような事件の背景には、価値観の多様化により規範となる尺度が見えにくくなったことで、自分の行為に対して善悪の判断がつきにくくなっている状況があるのではないのでしょうか。これを改善するためには、規範意識をしっかりともち、自分の力で生きていける子どもを育てる必要があります。

本校の道徳教育では、人間として生きていくために必要な基本的な価値観を学ばせるとともに、それに対する共通意識を育むことを目指しています。そのためには、将来に向かって夢や希望をもって生きていく子どもたちを育てることが大切であると考えます。

「生きる力」とは

「京都府教育振興プラン～つながり、創る、京の知恵～」より

- ・夢と希望を持ち、生涯にわたって自ら学び自らを高め、未来を見通し切り拓く**展望する力**
- ・豊かな感性と情緒、人権意識、道徳心を身に付け、自然、人、社会と**つながる力**
- ・自らの目標を実現するため、強くしなやかな意志をもち、失敗を恐れず**挑戦する力**

これらの力は、相互に関係し合い具体的な場面の状況に応じて機能する力です。人は生きていく中で、たくさんの人と出会い、様々な経験を通して生きがいを見つけ出します。自らが見つけ出した生きがいは「生きる力」となり、さらに、日々の生活を真剣に送ることで、自分自身で未来を拓いていく力につながっていくのです。「生きる力」を根底にもち、未来を拓いていく子どもを育む道徳教育を進めていきたいと考えています。

北城陽中学校の道徳の時間

1年生「人に迷惑をかけなければいいのか」

通学途中、他人の駐車場を横切れば近いのだが、そこは通り抜け禁止。先生から、通り抜けしないよう注意されたが、急いでいて、駐車場を通った時、空き瓶を踏んで転んでしまい、その空き瓶を駐車場の壁に投げつけた。割れた瓶のかけらを踏んだ車がパンクし、大騒ぎとなった。

「自分だけよければそれでよいのか？」

禁止されている道を通った理由も、瓶を投げた理由も、すべて自分勝手な、自己中心的な言い分だった。自分の都合を最優先するのではなく、他人のことを考え、その後のことを考えるべきだと思った。

2年生「明かり下の燭台」

東京五輪に出場した女子バレーボールチームで、選手達を献身的に支えたマネージャーの姿を見つめた監督の手記。選手として五輪への参加を望んでいた彼女にとって、マネージャーとなることは決して本意ではなかったが、彼女はマネージャーの役割に専念し、心身ともチームのために尽くし、責任を全うした。

どんな有名なチームでも、そのチームを世話してくれる人、支えてくれる人がいます。表舞台で活躍する選手達の陰でがんばっている人がいるからこそ、強いチームでいられるのだとわかりました。

3年生「ライバル」

仲の良い友人である啓介と康夫は、水泳ではライバルである。しかし、啓介はいつも康夫に負けてばかりで、二番手に甘んじていた。そんな中、康夫が入院し、啓介にチャンスが舞い込んでくる。二人の友情にひびが入りそうになりながらも互いに信じ合い、認め合い、励まし合うことで絆が結ばれる。

仲の良い関係でありながら、ライバルであることの難しさを感じました。選手として対決して勝負するのらいいけれど、病気で戦えないと、少し喜んでしまう自分がいたりします。心を打ち明け、わかり合える関係が大切です。